

### 【はじめに】

私は国際高校に入学し、1年生の頃から幅広い分野の調査や取り組みを行ってきた。探究活動の最初は、ボルネオ島が生産するパーム油について知ることから始まった。その後は地域の経済の調査や感染症対策の研究などをし活動をしていったことにより、私はただ調べ学習をするだけでなく自分達に何ができるのかを周囲の人に提案できるまでになっていった。特に感染症対策についてのゼミに属していた際には「新型コロナウイルス感染症の感染対策」にテーマを置き、幼児に向けて手作りのポスターや紙芝居を制作することができた。これらの活動を通して、やはりどんなことにおいても不可欠なものは人なのだと私は実感した。例えば地球にある資源を家庭で買えること、店に行けば生活用品が売られていること、小さな子供を育てられる環境が社会にあること、また仲間と共に探究活動ができることはどれも人がいるからこそである。しかし国連人口基金の記事「世界人口白書2022」によると、2022年時点で世界では79億人が生きているそうだ。そんな世界全体を見渡せば、他者と関わりを持つことを許容できない人間や自分自身と考える重きが合わない人間がいるということは残念ながら事実だ。だが、ある意味これこそが多様性の在り方であり、人間の面白いポイントなのかもしれない。だからこそ私は所属ゼミに「グローバルが生み出す力」を選択した。

このゼミが掲げる大きなテーマのひとつ、それは「多文化共生」である。私がゼミを選択した理由は、この多文化共生について掘り下げて学べるという点だ。先述の経験は私に、協同することの意義やそれぞれの人が持つ役割の在り方を齎したと思う。しかしそれ以上に、私は国際高校に通っていることが多文化共生を意識するきっかけになっていると考えている。この高校に入ってから私は、留学生やネイティブの先生方などの日本人以外の人と接触する機会がとて増えた。私達が普段何気なく話している日本の言葉や挨拶や挨拶が通用することは当たり前ではないということを実感し、私は異文化交流をするためには何が必要なのか、そもそも異文化交流は良い影響を持つのかを研究したいと思った。

### 【序論】

それから私は実際に多文化共生についてゼミで学んでいくのだが、最初に直面したことはまず多文化共生とは具体的に何を指すのかということだった。総務省(2006年)によると、多文化共生とは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されている。定義はあるものの、私達が欲しいのはリアリティ、そして多文化共生しているという事実だ。誰もが「多文化共生」を感じられる何かの形があれば良いと思った。これをきっかけに、私のグループは「ハラルマップ」を制作することになる。

まず「ハラルマップ」とは通称"ムスリム"と呼ばれるイスラム教徒の人々に向けて、飲食店や礼拝所の案内を示したマップである。なぜムスリムに着目したのかと言うと、ゼミの授業内でイスラム教の話題について触れたからだ。私達の周囲でムスリムは見かけないのだが、無意識のうちに私達は「イスラム」そのものに対し「イスラム教」「テロ」「紛争」「怖い」といった連想を抱いていたことに気がついた。そこで、偏見でものを見るより本当の姿を知ろう、と私達はイスラム教についてインターネットや本を用いて調べることにした。調べたところによると、イスラム教では独自の食べ物のしきたりが確立されているそうだ。例えば『豚肉を食べない』『アルコールや酒類に触れない』『1年に一度、約1ヵ月間の断食を行う』ということだ。食べ物以外でも、『1日5回の礼拝を行う』などがある。一見これらは異質かと思えるが、よく考えてみると日本でも『神社の前で拝む』といったような文化がいくつもある。私達日本人にもしきたりが多くあるからこそ、お互いに文化を

尊重するということを実現したい。そうして制作することになったのが、日本を訪れる観光客やムスリムの住人に向けた「ハラルマップ」だ。

## 【本論】

さて、ハラルマップを制作するにあたるこの活動のテーマは「多文化共生」だ。このマップには、異文化の尊重を概念ではなく一つの目に見える製品にするという点で価値があると考えている。ハラルマップを是非受け取ってもらいたい層はやはりムスリム、それも日本に在住もしくは訪れたムスリムだ。しかし私達は日本全域に対応したマップではなく、敢えて地元である奈良県のみを対象を絞って制作することにした。その理由は二つある。一つは、現在の奈良県の観光情勢に注目したからである。奈良県は観光地や自然物が多くおかれているため、例年であれば四季を問わず外国人観光客がよく訪れている地域だ。ハラルマップを制作することを決める前に実は、私達は現在の奈良県の観光の状況について調べていた。想像はしていたが、やはり2020年以降は新型コロナウイルス感染症が蔓延した影響により、奈良県を訪れる観光客の数が格段に少なくなっているようだった。最近ではまた奈良県を訪れる観光客の数も徐々に取り戻しつつあるものの、この状況でより観光客や活気を呼び起こすためには、以前以上の呼びかけや新たな取り組みの提案・実施が必要だと思える。グループでの活動当初から私達は、奈良県の観光に対して何かできることはないかと考えていた。また奈良県を対象を絞ってマップを制作したもう一つの理由は、多文化共生という考え方を確実に周囲に落とし込みたかったからである。これらを手取り早く広めるためには、たしかに日本全域に着手の方が期待はより見込めるかもしれない。しかしその前に、まずは地元である奈良県から着実に活動を起こしていきたいと思った。

一般的に、ムスリムが合法として食べることができる食品は「ハラルフード」と呼ばれる。ハラルマップのメインの肝となるのは、ハラルフードを扱ったレストランもしくは食料品店の紹介である。高校生が作るマップとはいえ、外部のお店の情報は慎重に取り扱わなければならない。私達は、奈良県で経営されているハラルフード取扱店をインターネットで調べた。そしてヒットしたお店一軒一軒に電話をかけ、掲載許可のアポイントメントを取った。電話をかけた時に数件のお店には掲載の承諾をいただいたものの、「自分の店はハラルフードを提供している覚えがない」というお店があったり、ずいぶん前に経営を終了しているお店があったりもした。またインターネットで調べた際には十数軒もの飲食店を確認したが、正式にハラルフード取扱店だと確認が取れたのは、およそその半分以下だった。私達は、インターネット上にある情報の不確定さを痛感した。

もともと私達が制作するハラルマップは、大まかに分類すると観光マップだ。また奈良県在住の日本人、外国人観光客を問わず、人に届ける以上はより一層クオリティの高い品物にしたい。そこで私達は奈良県観光課と奈良県猿沢インの施設の方々へお話を伺いに行き、実際に私達の制作したマップに目を通していただいた。その時にいただいたアドバイスとして、まず挙げられたのは「作り手が一生懸命作ったかではなく、受取手が制作品を必要とするか」ということだった。たしかに、自分達がどれだけ時間をかけて作ったからといって、受取手はその想いを汲んでムスリム関係なく誰もがハラルマップを欲しいとするわけではない。同時に、受取手がハラルマップに対して「持っていてよかった」と思えるための工夫、より使いやすいための工夫が不可欠だ。私達がすべきだとわかった工夫は大きく三つある。一つ目は「文字の見やすさ」。このマップのターゲットは日本人以外にも多く当てはまるので、文字を載せる際に私達は日本語に加えて英語やローマ字での表記も用いていた。だからこそ、全世界の人が読むことのできるヘボン式ローマ字を表記には用いなければならないというアドバイスをいただいた。また見やすさという点でも一つ挙げられたのは余白についてだ。お店の名前を掲載するとどうしてもそれぞれの店名の文字数に差がうまると同時に、背景に余白ができてしまうあまりに余白が大きすぎると内容の充実が薄れてしまうため、関連のある絵や吹き出しの情報を載せるなど手を加えることが必要だとわかった。次に、二つ目の工夫は「一目で理解できる地図」を載せることだ。一般的な地図は、主に記号も用いて作られている。私達が手作りで制作した地図には進路や分岐しか載せていなかったため、付近の神社やお寺の場所の目印も付けておくとより充実する。また地図は広範囲ではな

く、ある程度範囲を絞って載せると、情報を簡易に受け取れるという助言もいただいた。そして三つ目の工夫は「受取手が常に新しい情報を得られるようにする」ということだ。私達自身もインターネット上の情報につまづいたように、受取手はいつ物を受け取るかがわからない。一度制作するからには、その時以降も情報を更新する手立てが必要である。その実現として最適なのはQRコードをマップに載せておくことだ。オリジナルのサイトをインターネット上に設置するなどし、実際の情報が変わる度に私達もサイトを更新する。受取手にはスマートフォン等でその都度QRコードを読み取ってもらえば、新しい情報を共有することが可能なのだ。

奈良県観光課と猿沢インの方に助言いただいたこれら三つのことを受け、私達はもう一度ハラルマップのサンプルを見直すことにした。

また実は一軒だけ、ハラルフードを取り扱う飲食店にお話を伺うことができた。「PYハラールキッチン」というレストランだ。このレストランではハラルフードについてかなり重要なことを教わった。ハラルマップは私達が作るものの他にも、他の地方で会社によって制作されている既存のものも多くある。しかしそれらのマップに掲載される飲食店は「ハラール認証」という、ハラール認証機関から正式に承認を受けた国内認証団体が発行したハラール認証書を取得した店でなければならない。しかも店がこの認証を取得するためには、ハラルフード以外の食品を一切扱っていないということが条件であるようだ。PYハラールキッチンでお話を伺うまで私達はこれらの事実を知らず、衝撃を受けた。たしかに宗教上の事情というものにはデリケートな側面もある。その事情を何も知らない私達の手違いで、本来食べてはいけない食べ物を食べさせてしまうという事案が起きてしまえば最悪の場合、国際問題にも発展しかねない。だからこそPYハラールキッチンの店主はこのことを私達に真剣に話してくださり、食べ物以外にも手指消毒用のアルコールすら店に置いていないことを明かした。私達は宗教に触れてこのマップを制作する上で、国際問題のリスクも視野に入れて慎重に取り扱わなければならないと再確認した。

### 【結論】

これらの過程を得てマップを制作するのだが、私達がこのマップに期待している効果は三つある。一つは、Wi-Fiもしくはネットワークが無い環境でもマップを持って観光することが可能であること。二つ目は、デジタルを使いこなせない方でも簡単にマップを扱えること。そしてもう一つは、このマップを観光の記念品やお土産として持ち帰ることが可能であること、お土産になることだ。どれも、このハラルマップが紙媒体だからこそである特徴だ。現時点ではPYハラールキッチンをはじめとした、マップ掲載許可をいただいた飲食店や猿沢院には完成した私達のハラルマップを置いていただく予定である。その後のムスリムや観光客の様子も伺いながらマップの効果の有無を探りたいと思う。

### 【おわりに】

「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」すなわち「多文化共生」とは、良くも悪くも決まりや縛りの無いものだ。地域ごとの言語や文化はどれも根強いもので、それを取り払うことは恐らく今後もないだろう。しかしこれからの時代を生きていく私達人間にとって、国の枠組みを越えた繋がりは欠かせないはずだ。それは政治問題に関わらず、製品の輸入やエネルギー資源の調達などの身近な生活環境においても直結する。今の人間生活を維持するためには多文化共生が不可欠だ。そしてありきたりなことかもしれないが、多文化共生を実現させるために必要なのはやはり「自ら異文化に関わりを持つこと」だと私は考える。異文化についての情報を知ることあるいは聞くこと、他の地域の現場を見ることなど、方法は多様である。私達が製作したハラルマップは、その手段の一つだ。私達が以前よりこのハラルマップに期待していたのは、ムスリムをはじめとした観光客に安心して奈良県を訪れてもらえることだった。しかし今回ハラルマップの製作を通して、私達はムスリムに対応した奈良県観光の手段を作り出し、より多様な観光客層を積

極的に開拓することが最終目標であるのだと実感した。そしてそのために必要なのは結果に向けた取り組みを自らすることだ。具体的にどういうことなのか、今回のマップ製作の過程から挙げてみる。例えば私達は、掲載する各飲食店に私達から電話をかけたり、観光客の方がより手に取りやすいデザインを構想したり、観光課の方にお話を聞きに足を運んだりした。これは「周囲の人がこんなことをすれば効果を得られる」と受け身になるのではなく、「こんな結果に近づけるために自分達でこんな取り組みをする」主体的な姿勢にあたると思える。私達は自ら課題に取り組んだ。だからこそハラルマップが実現したと言いたい。今回完成したマップとその制作の過程、そしてこれから明らかになるであろうマップが地域社会に齎す効果そのものが、私達なりの「多文化共生」の形だと考える。

## 参考文献

国連人口基金「世界人口白書2022」(参照2022-10-01)

[https://tokyo.unfpa.org/sites/default/files/pub-pdf/swop2022\\_jpn\\_excerption\\_0.pdf](https://tokyo.unfpa.org/sites/default/files/pub-pdf/swop2022_jpn_excerption_0.pdf)

総務省 2006年(参照2022-10-01)

[https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b5.pdf](https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf)